

室俊司先生の思い出

富安敬二

最初に室先生にお会いしたのは、ちょうど20年前の1990年1月でした。当時、私は地方の国立大学に勤めていましたが、前年暮れに立教大学から声がかかり、学科の藤田先生にお会いするため、現在と同じ6号館の研究室にうかがいました。その頃、立教の教員の研究室は3人部屋で、室先生、松平先生が同室でした。今にして思えば面接試験だったのですが、最後の頃、ひょっこりと室先生が研究室に來られて声をかけてくださいました。とても上品な颯爽とした紳士というイメージで、さすがに立教大学の先生は都会的で洗練されているなと感心し、生意気ながら一緒にできたらと思ったものでした。その後、4月から正式に教員として勤めることになり、学科が歓迎会を開いてくださった折、室先生はひどく体調をくずされましたが、それは3月までの文学部長としての心労が重なっておられたためだったようです。室先生は紳士であるとともに、理念的なご意見をよく言われました。また卒論に関しても、ワープロで書きたい学生が出はじめてもあえて手書きを主張され、教育理念を貫き通されました。室先生は立教の教育学科の文化をととても大事にされ、通常の会議で話しきれない大きな方針などを決める会議を泊まり込みとしたり、学生や院生、卒業生までも参加するセミナーキャンプを、泊まり込みでやろうと提案されるなど、何かあれば一晩中徹底的に話そうという、いつも青年のような気概のある先生でした。

立教の同僚としては7、8年のおつきあいでしたが、先生のご退職の2年後、つまり11年前の3月末に、私は西武新宿線の沿線に引っ越しました。引っ越し当日くたくたになって家族全員で近く中華料理店に入ったところ、なんと室先生とばったりお会いしました。先生は隣駅にお住まいだと聞いていましたが、その後もしばしば近所でお目にかかり、何度もお話する機会がありました。ある時は喫茶店で、またある時は道端でお会いし、1時間近くその場でお話ししたこともありました。先生はつねに立教のことを気にかけておられ、本当に立教を愛しておられるのだと思いました。最後にお見かけしたのは2009年の3月頃で、今となってはその時にお声をかければよかったと本当に後悔しています。実は同じ町内に、立教の副理事長を務められた元岩波書店社長の緑川亨氏がいらしたのですが、7月にお亡くなりになったことを最近知りました。偶然にも同じ地域に住んでおられた立教の重鎮がたてつづけにご逝去され、痛恨の極みです。

室先生から学んだことは多く、とくに印象に残るのは、「促し、励まし、見守り、支える」とおっしゃっていたことでした。私も学科の最長老となり、あらためてこのことばの優しさと重みを噛み締めていきたいと思っています。

慎んでご冥福をお祈り申し上げます。